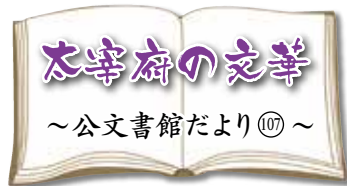


亀井昭陽と梅ヶ枝餅

亀井昭陽（かめい しょうやう南冥の長子）の著作の一つに『ほうざん にっぎ烽火山日記』があります。文化6（1809）年から7年にかけて、福岡藩の烽火台（烽火ほうかだいのろし）番士を勤めた体験を記した漢文日記で、昭陽の文名を高めた作品として知られています。

烽火台の設置は、文化5年の英軍艦長崎港侵入事件をきっかけに、長崎警備体制が強化されたことによります。福岡・佐賀藩内に烽火台を設置し、有事の際の連絡手段として長崎から小倉までの烽火リレー体制が整えられました。

福岡藩は天山（御笠郡）、四王寺山（糟屋郡）、陶籬嶺（しやうけ 越、穂波郡）、龍王山（同上）、六ヶ岳（鞍手郡）、石峰（遠賀郡）の6か所に烽火台を設置しました。甘棠館廃止後、城内組平士となっていた昭陽は、この烽火番を命じられます。番士は3人1組、十日ごとの交代制。実際は欠勤者も多く、昭陽は「70人の番士のうち半数が病欠なので忙しい」とこぼしています。一方昭陽自身は、見張りに立つ時間以外は読書や著述をし、弟子や知人から酒肴の差し入れや



陣中見舞いを受け、烽火勤務にも楽しみを見出していたようです。

『烽火山日記』によると、文化6年12月20日、四王寺山での勤務のため、百道松原の自宅を出発し水城村から入山。25日には山を下り、宰府村光蓮寺で月命日の母のために線香をあげ、同村岩淵に住む弟の雲来を訪ねます。弟宅で雪に汚れた足を洗い、のんびりと酒を飲み、良い気分の帰り道、山で待つ同僚への土産に梅ヶ枝餅を買いました。梅ヶ枝餅について昭陽は次のように記しています。「梅ヶ枝餅は焼き餅である。米粉の餅に小豆餡を詰め、凹字の型の鍋に押し付け、薄く平らになるように焼くと、表面に梅花の模様が立ち上がる」（原文は漢文）。約200年前、昭陽が目にした梅ヶ枝餅は現在とさほど変わらぬ姿だったことが分かります。果たして、持ち帰った宰府土産の梅ヶ枝餅は「皆蔗餡癖有り。喜ぶこと甚だし」（皆甘蔗癖なのでとても喜んだ）と同僚たちに大好評だったのです。